

『太平廣記』における「夢のごとし」

—唐代傳奇「南柯太守傳」は夢の話か

葉山恭江

はじめに

中國古小説における異界訪問譚の流れを考えるうえで、作中人物が何らかの入り口を通り抜けて、現實世界とは異なる世界を訪れるという話が散見することは注目すべきことである。

唐代傳奇「南柯太守傳」(『太平廣記』卷四七五)もその一つである。この話は、「南柯の夢」として知られるように、遊俠暮らしをしていた淳于棼が、夢で槐安國王の婿となり、南柯太守として過ごした後、現實世界に戻ってそれが夢であったことを嘆く内容の話である。その夢のはじめと終わりには「穴」を出入りする様子が描かれている。

この淳于棼が過ごした槐安國は、蟻の穴の中の世界であって、「南柯太守傳」は蟻の話としても知られている。この話の末尾にある李肇の贊に「貴極祿位、權傾國都、達人祝此、蟻聚何殊」とあり、高位高官となつて權勢が國都を傾けるほどでも、それを深淵思慮の人が見るならば、蟻の群れと違いはないことが述べられている。また、李肇『唐國史補』は、「有傳蟻穴而稱、李公佐南柯太守(蟻の穴を傳して稱贊された作に、李公佐の南柯太守がある)」と述べている。さ

らに、『太平廣記』も、卷四七五「昆蟲」三に「淳于棼」と題して「南柯太守傳」を収めていることから、昆蟲である蟻の話として分類したことがわかる。

このように「南柯太守傳」は「夢」や「蟻」の世界の話であるのみならず、「離魂」現象が描かれた話であることも、すでに指摘されているとおりである。乾一夫氏は『唐代傳奇』で、「南柯太守傳」は「夢と離魂という觀念を下敷きにしている。…槐安國へ行ったところの淳于生は、實は魂の方の彼だったのである」と述べている。また、森英雄氏・門脇廣文氏の論考は、淳于棼ら作中人物が「夢を見ていたのではなく、魂が肉體から離れたこと」によって蟻の巢（＝槐安國）という現實世界に實際に存在する特殊な空間に入って行き、滞在していた」と述べている。この森氏の「夢を見ていたのではなく、魂が肉體から離れた」という考察を受けて、本論考は、「南柯太守傳」の異界と現實世界の關係について、改めて検討を行いたい。

「夢」の話であると考えられてきた「南柯太守傳」であるが、その作中に「若夢（夢のごとし）」という表現がある。これは、酒に酔った淳于棼が枕につく場面の描寫で、「解巾就枕、昏然忽忽、髣髴若夢。見二紫衣使者（頭巾を解いて枕につくと、ぼんやりとして、夢のようになった。紫衣の使者二人を見た）」とある。このように、槐安國からの迎えである紫衣の使者一人を見る前に、「若夢（ゆめのごとし）」と表現されている。ここで「夢のごとし」とは、文字通り「夢のようである」ということであり、「夢」そのものと似ているけれど何らかの區別された状態を表していると考えられる。しかし、「南柯太守傳」は従来「夢」の物語とみなされてきたため、「夢のようである」とはどのような状態を表しているのかという検討はなされていない。

そこで本論考では、『太平廣記』に収録されている話における「夢のごとし」「若夢」「如夢」の用例を比較検討しながら、夢のような状態と、異界を訪問することの關係の一端を明らかにしたい。

一、「南柯太守傳」の「若夢」

本章では、「南柯太守傳」は「夢」の話であるのか、「夢」ではないのかについて、「枕中記」における「夢」の描き方や、「守宮」の話の「夢のごとし」という表現と比較することにより問題の所在を示す。

(一) 淳于棼の體驗は夢か、夢でないのか

「南柯太守傳」の淳于棼の體驗が「夢」の話として讀み取れるか否かについて、「夢」の語を作中でどのように用いているかを確認する。「南柯太守傳」には「夢」という語が四回用いられており、そのうち三回は、淳于棼が槐安國から現實世界に戻った後の行動を描いた場面である。

生遂發寤如初、見家之僮僕、擁篲于庭、二客濯足于榻。斜日未隱于西垣、餘樽尚湛于東牖。夢中倏忽、若度一世矣。生感念嗟嘆。遂呼二客而語之、驚駭、因與生出外、尋槐下穴。生指曰「此即夢中所驚入處。」

男（注：淳于棼を指す）は初めのように目覺めて、見ると、家の召使い童が庭で箒を掃いて、客二人は長いすのところまで足を洗っている。夕陽はまだ西の垣に隠れず、酒の樽はまだ東の窓邊に酒をたたえている。夢の中の短い時間に、一生を過ごしたかのようにだ。男は感嘆した。そして客二人を呼び、さきほどの體驗を語ったところ、二人はたいへん驚いて、男と一緒に外に出て、槐の下穴を探した。男は指さして「こここそが夢の中に入っていた場所だ」と言った。

まず一つめの「夢中倏忽、若度一世矣」は地の文である。「南柯太守傳」を語り進めている語り手が、作中人物であ

る淳于棼の視點を通じて「夢の中の短い時間に、一生を過ごしたかのようだ」と述べている。二つめの「夢中所驚人處」は淳于棼の臺詞である。この臺詞からは、槐の樹木の下にある穴を通して槐安國へ行った淳于棼當人が、その體驗を「夢」と認識していることが読みとれる。この二つの用例とも、淳于棼の體驗を淳于棼の視點から「夢」と判断しているものである。

この場面に續いて、淳于棼は槐の下に見つけたその穴を、客とともに掘り返して開いている。すると、そこに大きな蟻の巢が広がっており、その配置を確認したところ、先に淳于棼が過ごした槐安國内の地理と一致するものだった。そのことは「披閱窮跡、皆符所夢。(穴を開いて痕跡を探索すると、すべて夢にみたものと符合した)」と書かれており、ここでも槐安國へ行った淳于棼の體驗を、淳于棼の視點を通して、明らかに夢だと表現している。

これらのほかにもう一つ、淳于棼が槐安國へ行く前の場面で「夢」の語が用いられているが、こちらは「若夢」という表現になっており、夢だとは斷言していないことが注目される。

生解巾就枕、昏然忽忽、髻髻若夢。見二紫衣使者、跪拜生曰「槐安國王遣小臣致命奉邀。」生不覺下榻整衣、隨二使至門。見青油小車、駕以四牡、左右從者七八。扶生上車、出大戶、指古槐穴而去、使者即驅入穴中。生意頗甚異之、不敢致問。忽見山川風候、草木道路、與人世甚殊。

男は頭巾を解き枕に頭をつけると、意識がぼんやりとし、夢のようになった。二人の紫衣の使者が見え、彼らは跪いて拜禮し、「槐安國王が私どもを遣わしてお迎えにあがりました。」と男に言った。男は思わず寢臺を下りて着物を整え、二人の使者に従って門へ行った。黒塗りの小さな馬車を、四頭の牡馬に引かせて、左右に従者が七八人いるのを見た。男を助けて馬車に乗せ、大門を出て、古い槐の穴を目指して進み、使者はそのまま穴の中に駆け入った。男はこれを大變おかしな事だと思ったが、あえて尋ねなかった。急に、山川や氣候、草

木や道路が人の世とたいへん違っているのが見えた。

ここで淳于棼が「意識がぼんやりとし、夢のようになっ」て行った先は、日常の人間世界とは異なる風景氣候の世界であることが描かれている。この異界は、後のストーリー展開で明らかとなったように、現実世界の一部に實在する蟻の巢であった。

一方、「枕中記」(『文苑英華』卷八三三)は「南柯太守傳」に先行する話で、作品の構成が似ており、いずれも主人公の男が體驗した夢の話が書かれていると一般に考えられている。しかし、兩者における「夢」のできごとのはじめと終わりを確認してみると、描き方に異なる部分がある。その違いによって、「枕中記」は夢の話であり、「南柯太守傳」は實は夢の話ではないと読み取れる。

「枕中記」には「夢」の語は一回用いられており、作中人物盧生が經驗した立身榮華のできごとが「夢」であったことは、盧生が夢から覺める描寫から明らかである。

是夕、薨。盧生欠伸而悟、見其身方優於邸舍、呂翁坐其傍、主人蒸黍未熟、觸類如故。生蹶然而興、曰、「豈其夢寐也。」

(論者注：夢の世界で盧生は年を重ねて八十歳となり、病の床に伏していた)この夕方、亡くなった。盧生はあくびにのびをして目覺めて、見ると、自分の體は宿屋で仰向けになっており、呂翁はかたわらに座っていて、宿の主人が蒸している黍は炊きあがらず、周りの事物も元のままだった。男は驚いて飛び起きて、「なんとあれは夢だったのか。」と言った。

盧生は夢の中で亡くなり、意識が途絶えたその時に、目が覺めて現實世界の意識が戻ってる。そして盧生自身が先の體驗を夢であったと認識していることは、盧生の臺詞「豈其夢寐也」に表現されている。この夢に入る前に、盧生が道

士から借りた「青簑」の枕を使って眠り、枕の穴を通して異界に入っていく描寫がある。

言訖而目昏思寐。時主人方蒸黍。翁乃探囊中枕以授之曰、「子枕吾枕、當令子榮適如志。」其枕青簑、而竅其兩端。生俛首就之、見其竅漸大、明朝、乃舉身而入、遂至其家。

(盧生は) 言い終わると目の前が暗く眠りたくなった。その時、宿の主人はちょうど黍を蒸していた。老人はそこで袋を探って枕を盧生に與えて、「私の枕を枕にしなさい、あなたの榮適は思い通りになるだろう。」その枕は青簑で、兩端には穴が開いていた。男は頭を下げ、枕につくと、その穴がしだいに大きく明るくなるのを見たので、體を起こして入り、ついに自分の家に着いた。

「目の前が暗く眠りたなくなった(目昏思寐)」後に枕を使い、眠りに入る場面が表現されている。眠りに入った後の盧生の體驗が夢であることは、先ほど、目覺めた後の場面で確認したとおりであるが、ここで道士が與えた枕の兩端には穴があり、その穴から入って夢の世界へ行っている。入り口は、そこをくぐった先が異界であるという境界になっているのである。このように「枕中記」の場合は、はじめには枕の穴という入り口が書かれているが、終わりは夢から自然に目覺めた状態として描かれ、出口の穴のことは描かれていない。

「南柯太守傳」を改めて確認すると、入り口の穴と出口の穴がはっきり描かれている。始まりは「古い槐の穴を目標して進み、使者はそのまま穴の中に駆け入った(指古槐穴而去、使者即驅入穴中)」とある。また、終わりは次のようである。

生問使者曰「廣陵郡何時可到。」二使謳歌自若。久之。乃答曰「少頃即至。」俄出一穴、見本里閭巷、不改往日。潛然自悲、不覺流涕。二使者引生下車、入其門、升自階、己身臥于堂東廡之下。生甚驚畏、不敢前近。二使因大呼生之姓名數聲、生遂發寤如初。

男は使者に尋ねて「廣陵郡へはいつ着くだろうか。」と言った。使者二名は歌を歌って答えない。だいぶたって「もうじき着きます。」と言った。急に穴から出て、故郷の路地が、以前と變わらないのを見た。ひそかに悲しくなつて、思わず涙が流れた。使者二人は男を導いて車から下ろし、家の門を入れて、階段を上ると、自分の體が建物の東の軒先で横たわっているのを見た。男はたいへん驚いて、近づけなかつた。二人の使者が大きな聲で男の姓名を何回か呼んだので、男はついに初めのように目覺めた。

「南柯太守傳」の淳于棼の體験は、異界に入っていくはじめの場面で「夢のようである」と表現していた状態が、終わりでは、「已身臥于堂東廡之下」とあるように、體と魂が分離する状態であつたことが明らかとなつている。このうな魂が離れた状態が、淳于棼には夢と認識されているのである。この「南柯太守傳」の異界は、蟻の巢であるばかりではなく、冥界とつながる世界でもある。このことは、槐安國で過ごした淳于棼が、亡き父親と手紙を交わしていることや、槐安國に出入りした作中人物たちが、現實世界では重病や泥酔によって寝込んでいて、後に死んでしまうことかから讀み取れる。

以上をまとめると、「枕中記」「南柯太守傳」ともに共通しているのは、現實世界から異界へ向かうときに「穴」に入ること、作中の當事者が異界での體験を「夢」と認識していることである。一方、違いとしては、「枕中記」は盧生が目覺める場面の描き方から夢の體験として描いていることが明らかなのに対して、「南柯太守傳」の「夢のような體験は、淳于棼本人は夢だつたと認識しているが、實際は「離魂」して異界に過ごしたできごととして描かれている。

それでは、「夢のごとし」という表現を伴って、離魂の状態を描いたり、穴を出入りしたりするような話は他にもあるのだろうか。

(二) 異類の世界に行くときに、夢のようになる

「南柯太守傳」が『太平廣記』の昆蟲の部に收められていることはすでに述べたが、これとよく似た話が、同書卷四七六昆蟲四の「守宮」(出『西陽雜俎』)である。「守宮」の典故とされる『西陽雜俎』は、晩唐の段成式が編したものであり、「南柯太守傳」の作者李公佐はそれより前の中唐の人である。

「守宮」は次のような話である。夜中に勉強をしている士人のところへ、「こびと」が一人やってきて邪魔をしたので、こびとを拂い落とした。すると、こびとのおつきの者が群れで仕返しにやってきて、士人はこびとの世界へと連れ去られる。

其來索續如蟻、狀如騶卒、撲緣士人。士人恍然若夢、因囓四支、疾苦甚。復曰「汝不去、收損汝眼。」四五頭遂上其面。士人驚懼、隨出門。至堂東、遙望見一門、絕小、如節使牙門。士人乃叫「何物怪魅。敢凌人如此。」復被衆囓之、恍惚間、已入小門内。

その者たちは蟻のように連なって来て、姿は騎兵隊のようであり、士人になぐりかかった。士人はぼんやりと夢のようになり、手足に噛みつかれたのでひどく痛かった。さらに「おまえが来ないなら、目をつぶすぞ。」と言って、四、五頭はついに顔に上ってきた。士人驚き懼れて、つき従って門を出た。母屋の東に着くと、遙かに遠くに門が見え、とても小さいが、節度使の牙門のようである。士人は「何の化け物か。何だっこのように私を虐げるのか。」と叫ぶと、再び士人は皆に噛みつかれ、ぼんやりとする間に、すでに小さな門の中に入っていた。

このように、士人が異世界へ入って行くときに、門を見ており、その門が入り口となっていることがわかる。士人は連れこまれた異界で、こびとを拂い落とした所行を詫びさせられたが、「いつの間にか、すでに小さな門の外にいた(不

覺已在小門外」。それから朝になって、現實の世界に異界への入り口を確認する。

及明、尋其蹤跡。東壁古階下、有小穴如栗、守宮出入焉。

明け方になってから、その痕跡をさがした。東の壁の古い階段の下に、栗のような小さな穴があって、守宮が出入りしていたのであった。

このように、作中人物が異界を訪れて、その異界の痕跡を現實世界に求めるといふ一連の筋書きには、「南柯太守傳」の影響が考えられる。

また、「南柯太守傳」と「守宮」に共通している表現に「若夢（ゆめのごとし）」がある。「守宮」の場合は、士人が異界へ出入りする際に、人の通常の大きさでは通れないほどの小さな門をくぐる設定になっている。そこをどのように通ったかを無理なく説明しようとする書き手の意識が働いたものか、入るときは「ぼんやりとする間に」小さな門の中に入っており、出るときには「いつの間にか」門の外にいたと表現されている。しかし、この異界訪問は夢のできごととして位置づける表現がされておらず、また魂が離れたと表現されているのでもない。續くストーリーで守宮の巢だと確認した小さな穴の中の異界が、作中人物である士人が生きている現實世界の一部に、實際に守宮の巢として存在していることが読み取れるにすぎない。

このことから、「守宮」の「夢のごとし」という表現は、はっきりとした意識を保っていない状態を「夢のようだ」と表現したものだと言える。「守宮」の話が、「南柯太守傳」の蟲や小動物の世界という異界へ行く内容だけでなく、表現としても同じ「若夢」を用いていることから、「南柯太守傳」において一般に「夢」だと讀まれてきた淳于棼の體驗は、文字通り「夢のような」ものであって、「夢」ではなかったと解釋する可能性を含んでいることを、この「守宮」の「若夢」の例は示している。

それでは、「夢のごとし」という表現によって、他の作品にはどのような状態が表現されているだろうか。次の章では、『太平廣記』に收められている全作品を対象として、「夢のごとし」（「若夢」「如夢」とはどのような状態を表すのかを検討する。

二 『太平廣記』における「夢のごとし」

『太平廣記』に所收されている各話において、「夢のごとし」（「若夢」「如夢」という表現は、五十二例用いられている。その収録部の内譯は、『太平廣記』「夢」の部（卷二七六から卷二八二）に限られず、「神仙」「應報」「定數」「神」「鬼」「再生」「昆蟲」など十七の部にわたっている。すでに紹介した「南柯太守傳」「守宮」以外の五十例の「夢のごとし」について、「南柯太守傳」における異界が、冥界と現實世界をつなぐ世界であることから、特に「死」に關係する内容を「夢のごとし」と表現しているものを中心に検討することにする。

ここで、夢と現實が呼應したことを表現している「夢で見たように、現實となった」と讀み取れる十二例^⑤は、今回検討する異界訪問譚に分類しないため詳細は省く。このような用例は、「定數」と「夢」部の話が多くを占める。例えば、『太平廣記』卷二七八「夢三」の「國子監明經」（出『西陽雜俎』）は次のような話である。ある書生が晝寢をし、その夢の中で出會った人物に、來春に科擧に受かると言われ、さらになじみの店で食事をした後で目が覺めた。すると、なじみの店から使いがやって來て、先ほどの夢での食事代金を實際に請求された。店で確認した椅子や器物は明らかに「夢のとおり」だった（且隨驗所夢、相其榻器省如夢中）。また翌春には科擧に受かった。この話の「夢のごとし」は、夢と現實の呼應について「夢のようだ」と表現している。

また、異界と接した話であっても、異界への行き歸りの状態やそれを経験した人物の心理状態を「夢のごとし」と表現していない十四例⁽⁷⁾も除くことにする。この例としては卷二五「神仙二五」の「元柳二公」(出『續仙傳』)がある。元徹と柳實の二人は船旅の途中で遭難し、孤島に着いた。その地で、仙女たちの音楽や舞に接して「二人は恍惚として、天上を夢みているかのようであり、それは人の世では見聞できないものであった(二)子恍惚。若夢于鈞天、即人世罕聞見矣。」このように天女の舞や音楽にふれた心情を表現しており、舟にて遭難した時点での心情を表すものではない。以下、「死」に關係する異界に接した内容を「夢のごとし」と表現している二十四例について分類する。

- (一) 死ぬときに「夢のように」なる
- (二) 生き返るとき「夢のように」感じた
- (三) 生き返った者が、死んでいたとき「夢のよう」だったと言った
- (四) 死にきれず、魂神がさまよい「夢か酔ったよう」だと言った
- (五) (死者が) 現實世界に夢のように現れた

(一) 死ぬときに「夢のように」なる

死ぬときに「夢のように」なるという用例は六例ある。「董奉」(卷十二「神仙十二」)、「李大安」(卷九十九「釋證一」)、「王忠幹」(卷百六「報應六 金剛經」)、「杜智楷」(卷百十一「報應十 觀音經」)、「趙斐」(卷三百八十一「再生七」)、「古元之」(卷三百八十三「再生九」)である。

「董奉」(出『神仙傳』)の例では、董奉は長生を得た者で、杜燮は死んで三日経っていたが、董奉が薬を飲ませると生き返っている。

又杜燮爲交州刺史。得毒病死、死已三日、奉時在彼、乃往、與藥三丸、內在口中、以水灌之、使人捧舉其頭、搖而消之、須臾、手足似動、顔色漸還。半日乃能起坐。後四日乃能語。云「死時奄忽如夢、見有十數烏衣人來。收燮上車去、入大赤門、徑以付獄中……」

また杜燮は交州刺史であった。苦しんで病死し、死んでからすでに三日であったが、奉がその時交州にいて、杜燮のところへ行き、藥三丸を口に含ませて、水をそそいで、杜燮の頭を人に叩かせ、搖らして藥を溶かすと、ほどなく、手足が動いたようになり、顔色が次第に戻った。半日すると起き上がった。その後四日して話すことができ、言った。「死んだ時たちまち夢のようになって、十数の黒衣の人が來たのを見た。私を車に乗せて行き、大きな赤門を入れて、獄の中に行った……」。

このように、病死から生き返った杜燮が、死んだときの様子を振り返って「夢のようになった」と語っていて、迎えの車に乗って門をくぐって異界に入ったことになっている。

「杜智楷」(出『法苑珠林』)では、杜智楷は太山に隱居していたが、あるとき急な病にかかった。

忽患疾垂死、以袈裟覆體、昏然如夢。

たちまち急な病で死にそうになり、袈裟で體を覆って、ぼんやりと夢のようになった。

夢のようになった後、老母と十數人の美女に出會い、觀音菩薩經を唱えると「ほどなく、體にたいそうな汗をかいてると感じて、すぐに治った(少間、遂覺體上大汗、即愈)」とある。

「王忠幹」(出『酉陽雜俎』)では、王忠幹は戰場で死んでしまい、異界へ行った。

忠幹既死。如夢、至荒野、遇大河、欲渡無因、仰天哭。

王忠幹はすでに死んでしまった。夢のようになり、荒野で大きな河に行き當たり、渡ろうにも渡れず、天を

仰いで嘆いた。

王忠幹が河を前にして嘆いたところへ神人が現れて、河を渡してやろうと言う。そして王忠幹は神人に空中へ放り投げられて地面に着いた。すると、たちまち夢が覺めたようになって、敵陣で二更を告げる音を聞いた（忽如夢覺、聞賊城上交二更）。ここでの夢から覺めたようになるという描寫は次の（二）と關係してくる。

以上の話のように、夢のようになった後に、異界へ行き、日常では經驗できないようなできごとが描かれることは、他の話にも共通するものである。

（二）生き返るとき「夢のように」に感じた

生き返るとき「夢のように」に感じたという用例は十一例ある。「潘尊師」（卷四十九）「神仙四十九」、「孫咸」（卷百五）「報應五 金剛經」、「王忠幹」（卷百六）「報應六金剛經」、「高涉」（卷百七）「報應七 金剛經」、「李敏求」（卷百五十七）「定數十二」、「楊林」（卷二百八十三）「巫」、「沈聿」（卷三百七）「神十七」、「李簡」（卷三百七十六）「再生一」
「張質」（卷三百八十）「再生六」、「趙裴」（卷三百八十一）「再生七」、「辛察」（卷三百八十五）「生成十一」である。

「沈聿」（出「集異記」）では、沈聿が、ある日晝寢をしていて、使者の迎えを受けた。

一日晝寢堂之東軒。忽驚寤。見二黃衣吏謂聿曰。「府司召郎。」聿自謂「官罷。無事詣府。」拒之未行。二吏堅呼、聿不覺隨出。

ある日晝に建物の東の軒下で寝ていた。急に目覺めて、黄色の服の二人の使いを見た。使いは「府の長官があるなを召しす。」聿は言った「官は辭めた。府に伺う用はない。」斷って行かなかつた。使いの二人は堅持して呼ぶので、聿は思はずつき従つて出かけた。

沈聿が出かけた先で、門を通過して府中に入ると、その長官は、沈聿のすでに亡くなった先祖だった。しばらく話をした後で、「あなたは死んでいたのだ、すぐに歸るがよい（爾死矣、宜速歸）」と言われて退出した。ほどなく、「急に目が覺めたかと思うと、もう夕方だった（忽若夢覺、日已夕矣）」のである。

「楊林」（出『幽明錄』）は枕の中の異界に行った話で、「枕中記」の類話として知られている。楊林が枕の小さな穴から中に入り、結婚し息子たちも生まれて榮華の生活をおくる。ところが、「急に夢が覺めたように思い、枕の側に依然としてあった。（忽如夢覺。猶在枕傍）」ため呆然とするところで話が終わる。この話は、枕と巫女の力によって、異界を経験する話だが、その訪れた世界に死の要素は表現されていない。また、入っていく穴はあるものの、穴から出てきたという描寫がないところも「枕中記」と共通している。

「孫咸」（出『酉陽雜俎』）は、孫咸が死からよみがえって、死んでいた間の體驗を語るものである。

孫咸暴卒、信宿却蘇。言至一處如王者所居、儀衛甚嚴：

孫咸は急に亡くなって、一晚経ってまた生き返った。そして言うことには、ある王様の住まいのようなところで、護衛もたいへん嚴かだった…。

この世界は冥界であり、地藏王に出会った。

地藏令一吏送歸、不許漏洩冥事。及廻如夢。妻兒環泣、已一日矣。

地藏王は吏に孫咸を送らせて、冥界のことを漏らすなと言った。戻ってみると夢のようで、妻や子は取り巻いて泣いており、すでに一日経っていたのだ。

この話では、御殿の様子を描くことから始まっていて、異界へ着くまでに穴に入ったり門くぐったりする描寫はない。

「李敏求」（出『河東記』）では、李敏求は科擧を何度も受けても十年以上受からなかったのだが、訪れた異界で三年

後に官を得るだろうと言われて、そのとおりに言ったと言う。李敏求が、ある暮れ方に長安の宿屋で夜に愁いて座っていたときに、異變が起きた。

忽覺形魂相離、其身飄飄、如雲氣而遊。漸涉丘墟、荒野之外、山川草木、無異人間。

たちまち體と魂が離れたように感じて、その身はひょうひょうと雲氣のようになって漂った。しばらく丘墟を移動して、荒野の外に出たが、山川や草木は、人の世界と變わるころがなかった。

その異界から戻るときの様子は次のように書かれている。

似被推落大坑中。卽如夢覺。于時向曙、身乃在昨宵愁坐之所。

大きな穴の中に落とされたように感じて、そのとき夢が覺めたように感じた。時刻は明け方になろうとし、その身は昨晩愁いて座っていたところにあった。

「辛察」(出『河東記』)では、辛察が、急な頭痛で息絶えたが、心臓のあたりが少し暖かかった(忽患頭痛而絶、心上微暖)。續いて次のように書かれている。

初見有黄衫人、就其牀。以手相就而出。既而返顧本身、則已殯矣。

初め、黄色の着物の人がいるのが見え、辛察の寢床に近づいた。手をとって従えて外へ出た。その後で自分の體を顧みれば、すでに死んでいるのだった。

辛察は、死んでいる自分の周囲で家族が泣き悲しみ、蘇生を試みている様子を見て、氣分が悪くなったが、黄色の着物の人に従って門から出た。その後、辛察が家に歸ってきた時は明け方であったが、自分の體を取り圍む家族の様子は昨夜と變わらない。

不覺形神合而蘇。良久、思如夢非夢。乃曰「向者更何事。」妻具言家童中惡、作君語、索六百張紙作錢、以焚之。

皆如前事、察頗驚異。

いつとも分からぬ間に、體と精神が合わさって生き返った。しばらくして、(先ほど體驗したできごとは)夢のようであって夢でないと思つた。そこで「先ほどは何があつたか」と聞いたところ、妻が事細かに言うには、家の召使いが憑きものにあたつて、あなたの口調で、紙六百枚を求めて紙錢にして、これを焚くようにと話したとのこと。すべて先のできごとのおりで、辛察はたいへん驚いた。

この「夢のようであつて夢でない」という表現の、「夢でない」という部分は、いわば假死状態である辛察が精神のみで經驗したできごとと、現實世界で家族がとつた行動が一致していることにつながる表現といえる。その點で、夢と現實の呼應を表している。一方で、體と精神が合わさつて蘇生したときに、それまでの異界での體驗が「夢のよう」だと思ふという點はこれまでに擧げた話と共通している。

以上の話に見られるように、ここでの異界は死の世界であり、その世界から現實に戻るときに、夢から覺めたように感じると表現されている。またそのように感じた人物は、生き返つた當人であることが讀み取れるが、表現方法としては、當人の臺詞ではなく、地の文に語り手の言葉として表していることが共通している。

(三) 生き返つた者が、死んでいたとき「夢のよう」だつたと言つた

死んでいたときに「夢のよう」だつたという用例は三例ある。「南續」(卷三百三「神十三」)、「盧仲海」(卷三百三十八「鬼二十三」)、「崔涵」(卷三百七十五「再生一」)である。

「盧仲海」(出「通幽錄」)は、盧仲海の從叔である續が、死んでよみがえつた話である。ある夜に、續は酒を飲み過ぎて死んでしまった。その介抱していた盧仲海は悲しんだが、續の心臓のあたりがまだ暖かかったので、續の魂を呼び

戻そうと名前を數萬回も連呼し續けた。突然、續はよみがえって、死んでいた間の事を話した。それによると、連れられていった先で、たいそうなもてなしを受けており、盧仲海に「あなたが私を呼んでいなかったら、自分の體がここにある事をすっかり忘れてしまった。私が連れて行かれた當初、まるで夢のようであった（若不呼我、都忘身在此。吾始去也、宛然如夢）」と言った。この用例では、離魂を體驗した當人の臺詞として「夢のよう」だと表現している。

(四) 死にきれず、魂神がさまよい「夢か酔ったよう」だと言った

魂神の状態でさまよっている幽靈（鬼）が「夢か酔ったよう」だと話す一例がある。

「郝惟諒」（卷三百五十「鬼三十五」）出『西陽雜俎』は次のような話である。郝惟諒は寒食の時に郊外へ遊びに行き、酔っ拂って墓の間で寐てしまった。夜になって起きて歸ろうとすると、道ばたに人家を見た。そこに一人の女がいて、郝惟諒に言った。自分は故郷に墓を移してもらえないまま時が経ってしまい「魂神が死後の世界の戸籍に入ることができず、さまよってぼうぜんとし、夢か酔っぱらったかのようだ（魂神不爲陰司所籍。雖散恍惚、如夢如醉）」郝惟諒はこの女に頼まれたとおり、歸ってから葬式を出してやった。

この話では、死者である女が自分の心情を直接話す表現になっており、故郷で正式な墓に葬ってもらえない状態が、「夢か酔ったよう」であると言っている。この夢と酒酔いを並べる表現には、魂が離れる前の状態としてしばしば、酒に泥酔した状態が描かれることが連想される。

(五) (死者が) 現實世界に夢のように現れた

死者が現實世界に「夢のように」現れたという用例は三例ある。「袁炳」（卷三百二十六「鬼十一」）、「蕭遇」（卷三百

三十八「鬼二十三」、「張懷武」(卷三百十三「神二十三」)である。

「袁炳」(出『冥祥記』)は、亡くなった袁炳が司馬遜の元に現れたという話である。

亡後積年、友人司馬遜、于將曉聞如夢。見炳來、陳敘闊別、訊問安否。

(袁炳が)亡くなってから長年たって、友人の司馬遜は明け方になろうとする頃に夢のようになった。炳が來たのが見え、長いこと會っていなかったことを申し述べて、近頃の様子を尋ねた。

袁炳と司馬遜はしばらく會話をした後に別れる。そのときの見送りの様子は次のようであった。

揖別而去。初炳來闇夜、遜亦了不覺所以。天明得覩見。炳既去、遜下牀送之。始躡履而還暗、見炳脚間有光、可尺許、亦得照其兩足。餘地猶皆闇云。

兩手を組んで別れの挨拶をし、(炳は)立ち去った。初め、炳は闇夜にやって來たので、遜もまた様子がわからなかった。明け方になってよく見ることができた。炳がすでに立ち去って、遜はベッドから下りて炳を送った。始め、足をはくのに依然として暗かったが、炳の脚のあたりに一尺ばかり光があり、その兩足を照らすのが見えた。その周邊はまだまだ暗がりのままだったという。

袁炳が來たときに「夢のよう」であったとあるが、歸るときの描寫は、夢の中のできごとというよりは、ベッドから起きた司馬遜が実際に見送りをしている場面として描かれている。このことから、夢のようであるが、夢ではないものを表現しているといえる。

「蕭遇」(出『通幽記』)は、蕭遇が亡くなった母に會った話である。蕭遇は幼くして親に死に別れ數十年、母の墓を探し出して改葬しようとしたが、かなわずにいた。そんなある夜のできごとである。

端居一室。夜忽如夢中、聞戶外有聲、呼遇小名曰「吾是爾母。」遇驚走、出戶拜迎。見其母、母從暗中出。遇與相

見如平生。

(蕭遇は) 部屋に引きこもっていた。夜にたちまち夢の中のようになり、外から自分の幼名を呼ぶ聲が聞こえて「私はおまえの母だよ」と言う。遇は驚いて走り玄關を出て迎への挨拶をした。自分の母が見え、母は暗がりから出てきた。遇と對面して往時のようである。

このように、蕭遇が「夢のよう」になったとき母の聲がして、母の姿を目にした。しばらく會話したあとに母が立ち去るところでは「言い終わると、ふっと見えなくなった(言訖而去。倏忽不見)」とあり、そのまま蕭遇は聲を上げて泣いて夜明けを待ったのである。

以上のように、「夢のごとし」とは、夢ではないものを夢のようであると表現していると言える。

おわりに

『南柯太守傳』が「夢」の話として読み取れるのは、淳于棼が槐安國から戻った時點で夢から覺めて感慨にふける描寫がなされていることによる。「夢中倏忽、若度一世矣。生感念嗟歎(夢のなかではあっという間に一生を過ごしたか)のようだ。男は感じ入って嘆いた」とあることから、異界へ行ったできごとが作中人物淳于棼の感覺を通じて、夢として位置づけられていることがわかる。

しかし、『太平廣記』における「夢のごとし」という用例を検討したところ次のことがわかった。「夢のごとし」は、「夢のように現實になる」という夢と現實の呼應を表すほか、死後の世界に接する經驗に關して「夢のようである」と表すものが多くあることが明らかになった。

『南柯太守傳』で淳于棼が異界へ行く當初の「生解巾就枕、昏然忽忽、髣髴若夢（男は頭巾を解き枕に頭をつける、意識がぼんやりとし、夢のようになった）」という表現は、淳于棼が現實世界から異界へ向かう状態であり、その境界を表している。『南柯太守傳』は、淳于棼が離魂によって経験した異界を、現實世界にある蟻の穴の世界として位置づけるときに、「夢」を效果的に用いていると言えよう。

注

- (1) 異界訪問譚とは、登場人物が日頃住んでいる世界とは何らかが異なる空間への移動を伴う話のことである。安藤信廣氏は、異界を「日常生活圏の外にあり、それは次元を異にする世界」とし、その例として、山・川・市場を擧げている（『中國文學と異界』『新しい漢文教育』二〇、一九九五年）。先坊幸子氏は、「異界説話」として五つに分類し、天界（天の河）に行く話、神の世界に入る話、仙人の世界に入る話、「桃花源」の村に入る話としている（『六朝「異界説話」と「桃花源」』『中國中世文學研究』三三五、一九九九年）。また先坊氏は、冥界に行く話は「再生説話」、墓の中へ行く話は「幽婚説話」として別に分類している（『六朝の「異界説話」』『中國中世文學研究』三三六、一九九九年）。廬秀滿氏は「唐代小説に見られる別世界―仙界と冥界の時間意識について」（『中國學研究論集』二、一九九八年）で、異界として仙界と冥界を取り上げ、そのでの時間経過が人間世界とは異なることを述べている。
- (2) 内田泉之介・乾一夫『唐代傳奇』明治書院、一九七一年。
- (3) 森英雄・門脇廣文「南柯太守傳」の夢について―離魂譚としての視點から、『大東文化大學漢學會誌』五五、二〇一六年。
- (4) 詳細は、拙論「南柯太守傳」の時空と語りの枠―生き直させられた夢『集刊東洋學』一〇二、二〇〇九年。
- (5) 内譯は次のとおりである。「神仙」三例、「釋證」一例、「報應」七例、「定數」四例、「感應」一例、「書」一例、「夢」一〇例、「巫」一例、「神」四例、「鬼」七例、「靈異」一例、「再生」六例、「生成」一例、「龍」一例、「畜獸」一例、「昆蟲」二例、「蠻夷」一例。
- (6) 「僧曇暢」（卷百二十七「報應二十六」）、「樊陽源」（卷百五十四「定數九」）、「陳彥博」（卷百五十四「定數九」）、「何敬叔」（卷百六十一「感應二」）、「何敬叔」（卷二百七十六「夢一」）、「何敬叔」（卷百六十一「感應一」）と同じ内容、「裴元質」（卷二百七

十七「夢二 夢休徵上」、「韋詞」(卷二百七十八「夢三 夢休徵下」、「楊敬之」(卷二百七十八「夢三 夢休徵下」、「國子監明經」(卷二百七十八「夢三 夢休徵下」、「豆盧榮」(卷二百八十「夢五 鬼神上」、「朱拯」(卷二百八十一「夢六 鬼神下」、「劉道濟」(卷二百八十二「夢七」。

(?)

「元柳二公」(卷二十五「神仙二十五」、「白仁哲」(卷百三「報應一 金剛經」、「李甲」(卷百五十八「定數十三」、「韋叔文」(卷二百九「畫四」、「召皎」(卷二百七十九「夢四 夢咎徵」、「張生」(卷二百八十二「夢七 夢遊下」、「進士雀生」(卷三百十一「神二十一」、「李赤」(卷三百四十一「鬼二十六」、「王超」(卷三百四十九「鬼三十四」、「牟穎」(卷三百五十二「鬼三十七」、「金精山木」(卷三百七十四「靈異」、「郭彥郎」(卷四百二十五「龍八」、「張全」(卷四百三十六「畜獸三」、「飛頭獠」(卷四百八十二「蠻夷三」)。